私のテーマ

「龍馬と薩摩藩 近代を切り開いた組織力」

森本　琢磨

筆者が学芸員として勤めている「龍馬の生まれたまち記念館」では、今春、企画展「群像から見る幕末史 vol.1 龍馬と薩摩藩　近代を切り開いた組織力」を開催した。昨年の大河ドラマの記憶も新しい薩摩藩に焦点を当てながら、同藩及び坂本龍馬とその同志たちが明治維新に果たした役割を追う内容である。

幕末と国防思想

明治維新に土佐藩や薩摩藩が貢献したことは周知の事実だが、その際に語られやすいのが、龍馬や西郷隆盛といった「英雄」によって新時代が作られたという史観である。だが、龍馬や西郷も、薩摩藩という巨大な「組織」の存在なくしては、活躍の場はなかった。そして、その視点で幕末史を見た時、彼ら以上に注目すべき人物や組織的構造が見えてくる。

幕末という時代を理解するためには、まずは当時の人々が持っていた国防思想に目を向けねばならない。列強の脅威が迫る中、どのようにして国土を守るのかという意識をこの時期の武士階級は皆持っていたが、その方法論や権力の座を巡って、多くの争いが起きたのである。海に面した薩摩藩では特に国防意識が顕著で、ペリー来航以前から西洋の技術を採り入れながら、軍事力と科学力を研磨していた。

そして、ペリー来航以後、日本が本格的に「世界」と対峙していかねばならなくなると、薩摩藩は歴史の表舞台に乗り出していく。幕府の衰退は、雄藩勢力の発言力を増加させ、その勢いに乗って同藩は中央政局に影響力を持つほどになった。文久二（一八六二）年に薩摩藩主導で実施された「文久の改革」は、その典型である。しかし、この頃の薩摩藩に幕府を倒す意思はなく、むしろその延命路線であった。

同藩が、幕府に警戒を持ち始めたのは、元治元（一八六四）年の第一次長州征討の頃からである。その背景には、「長州の次は、薩摩が幕府に狙われる番ではないか」との不安を藩上層部が持ったことにあった。幕府延命から「抗幕（幕府に対抗する）」へと舵を切った同藩は、そのために長州藩と連合することを決定する。そして、近代海軍の技術を持つ龍馬らを取り込み、薩長連合（薩長同盟）プロジェクトの一翼を担わせた。

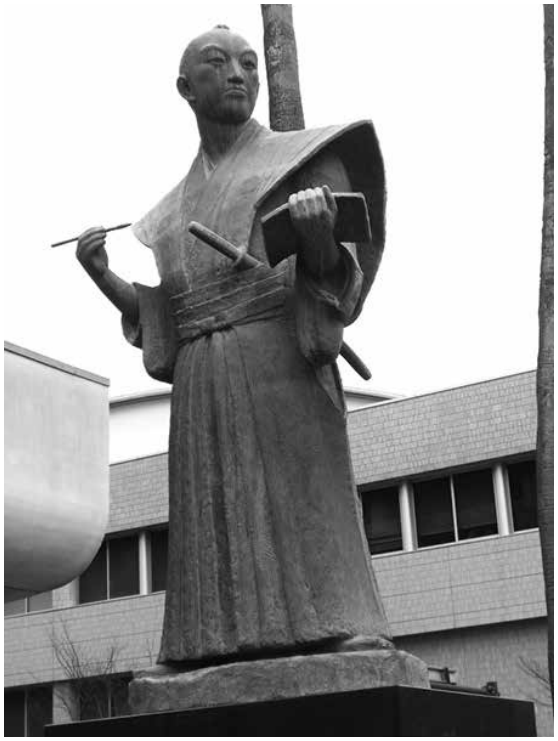
薩長連合と大政奉還

薩長連合は龍馬のアイデアではなく、あくまで薩摩藩主導で進められた。そして、その中心的人物は、国父・島津久光と家老・小松帯刀であった。薩長間を経済的取引で結ばせることで融和を促したというプランも、双方の要求から始まったものであり、龍馬の発案ではない。だが、このプロジェクトにおいて縦横無尽の行動力と交渉能力を発揮した龍馬の功績は、決して色あせることはないだろう。

また、プロジェクトの最終局面となる「艦船を薩摩名義で買い、それを長州に渡す」という計画を成功に導いたのは、龍馬の同志・近藤長次郎であった。薩長上層部の長次郎に対する信頼度は高く、長州藩主から薩摩藩主に宛てた親書内の「詳細は、長次郎に聞いてください」という旨の記述は、それを証明している。

こうして慶応二（一八六六）年一月、薩長連合は締結に至るが、両藩ともこの時点では、「倒幕」までは考えていなかったようだ。しかし、翌年五月に行われた「四侯会議」以来、薩摩藩は将軍・徳川慶喜を警戒し、武力も辞さない「討幕」路線へと踏み出していくこととなる。以後、薩摩藩は「武力討幕派」との分類をされることがあるが、事はそう単純ではない。薩摩藩は、武力の選択肢を持ちつつも、できるだけ血を流さない方法論を模索しながら大政奉還策を進めていたことは、もっと周知されねばならないだろう。

本稿は、決して筆者の実績に基づくものではなく、町田明広・神田外語大学准教授をはじめ研究者の方々が積み重ねた成果をもとに記述した。幕末の薩摩藩研究は、近年、玉里島津家史料群が公開されたことで、「まさにこれから」の局面が強い分野である。研究者の方々に敬意を持ち、その成果から謙虚に学んでいく姿勢を忘れないようにしたい。



小松帯刀像（鹿児島市）

第11回高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会 研究発表会

テーマ「龍馬の生きた時代を考える」

今年の「高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会」は5月25日（土）、龍馬記念館のホールにおいて第11回大会を開催した。

来賓の高知県文化生活スポーツ部の橋口欣二部長様、高知市教育委員会の高岡幸史教育次長様から、設立10周年の節目を迎えた本会への期待を込めたご祝辞をいただいた。

特別講演には、京都国立博物館の上席研究員の宮川禎一様をお招きし、「寺田屋登勢と坂本龍馬 ～登勢の手紙の真意～」と題して深い考察をもとにした研究が発表された。つまり、薩長同盟を成し遂げた龍馬が幕府側に襲撃された寺田屋事件は、龍馬の思惑を超えるほどの成果であったに違いないというものである。

会員による研究発表は、左頁の通り、今井章博氏の「龍馬15年忌祭をめぐる元海援隊士達の動向」、佐竹敏彦氏の「龍馬のこころを伝えたい」、広井護氏の「『竜馬がゆく』のスリルとサスペンス」、亀尾美香氏の「岡崎菊右衛門日記にみる幕末」の興味深いものとなった。詳細は本学会の発行する「論集」をお目通しいただきたいと考えている。

今年は72名の参加であったが、来年の再会を誓い合って「宣言」の発表となった。

宣言

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会は、平成二十一年四月の発足から十年を経過し、県内外から七十二人が参加して第十一回研究発表会を開いた。テーマは「龍馬の生きた時代を考える」。社会のさまざまな場面で新しいことと旧態依然とした姿が交錯する中、龍馬とその時代に学び、人と人とのつながりの大切さを考えようとしたものだ。

特別講演は京都国立博物館上席研究員の宮川禎一さん。他に、県内の四人の研究家が日頃の研鑽に基づいた発表を行い、私たちは多くのことを学んだ。

坂本龍馬記念館のグレードアップとともに、県下至る所で龍馬の掲示が見られるようになってきた。ただ、子どもたちにどれくらい龍馬のことが正しく届いているのだろうか。龍馬が逝って一五二年。戊辰戦争終結から一五〇年。私たちは龍馬らの生きた激動と変革の時代に学びつつ、子どもたちにも龍馬の生き方を語りながら、悔いの残らない道を確実に歩んでいきたいと思う。

二〇一九年五月二十五日
高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

特別講演

寺田屋登勢と坂本龍馬 —登勢の手紙の真意—

京都国立博物館　上席研究員　**宮川 禎一** 氏

本講演の主となるのは、慶応二（八六六）年三月頃の「坂本龍馬宛て寺田屋登勢の手紙」である。この手紙は、薩長同盟直後に寺田屋で伏見奉行所の襲撃を受け、上手く逃げおおせた龍馬に対して書かれたもので、宮川氏は、この文章に「何かの気配」を感じたそうだ。

今回の龍馬学会では、最後の発表者である広井護氏が『竜馬がゆく』の深層読みについて発表なされた。広井氏曰く、「違和感のある文章には、必ず作者の意図がある」そうだが、お登勢の手紙は違和感だらけである。学会最初の特別講演と、最後の発表がリンクしており、大変興味深く拝聴した。

まず、宮川氏が注目したのは、お登勢の文章力である。「事件の光景が眼前に浮かぶような文章の力。表現の巧みさに注目すべきだ。幕末にこんな手紙を書いた女性がいたことに驚く」と。さらに「寺田屋のことを『ある宿』とか、体験したことを『よそで聞いた咄』だとか、伝聞として記すところが『秘密の通信』らしく面白い」ともおっしゃられた。確かに非常に面白い文章で、お登勢の教養の高さとセンスの良さを感じる。最後の署名も「お登勢」などと書かず、「血ノ薬ご存知」となっているのも面白い。

お登勢は、龍馬らが逃げた後、二階に上がり「それからどうぞして品物をかくさんと思ひ候へども思うにまかせず」と書いており、龍馬の大事な書類が奪われたことを報告している。これによって、薩長同盟のことが幕府方や諸藩に知られてしまった。

宮川氏は、書類が奪われることについて、実は龍馬がお登勢を相棒にして仕組んだ謀略ではないかと推測されている。奪われ方は想定外（こっそり盗みに来ることを想定）ではあったが、予定通り奪われたので、作戦の成功を報告したのがこの手紙である、ということだ。

確かに、この手紙はおかしい。なぜ宿の女将が「品物をかくさん」とするのか。奉行所役人に見られてはいけない物を龍馬が持っている、とお登勢は知っていたことになる。しかも、普通であれば、龍馬が持って逃げるか、火鉢で燃やして処分するべき重要文書を、置いていったことも知っていて、二階へ上るのだ。宮川氏はこの行動を、お登勢の芝居ではないかと推測している。

龍馬とお登勢の謀略の目的は、薩長同盟の情報リークではないか、というのが宮川氏の見立てである。長州藩と手を結ぶことについて、薩摩藩内には反対派も存在した。しかし、世間にも幕府にも薩長同盟が知れ渡れば、薩摩藩は後戻りできなくなる。それを見越しての謀略ということだ。

この説の証明は難しいが、非常に興味深い推測であり、示唆に富むものだった。今後、「違和感のある文章」に行き当たれば、その先に隠された真意を読み解く必要性を教えていただいた。

岡崎菊右衛門日記に見る幕末
―参勤・江戸詰の記録を中心に―

高知県立坂本龍馬記念館
主任学芸員
亀尾　美香

平成二十八年度に寄贈を受けた岡崎家文書のうち、幕末の日記五点（嘉永四年～安政六年）を中心に考察した。

岡崎菊右衛門は土佐藩士（軽格）で、藩主の参勤に何度も随従している。主に豊信（容堂）への随従を中心に六回の参勤記録を調べたところ、土佐から江戸までは二十五～三十二日の旅程、中山道を通った二回以外は東海道を通行していた。菊右衛門日記には参勤の旅の様子のほか、江戸詰の勤務や生活、供をする藩主の行動なども詳細に書かれており、極めて貴重な記録といえる。

また、日記の安政元年四月部分には、菊右衛門が坂本龍馬から「ヒス銃打方詞遣小冊」を借りたという記述がある。江戸滞在中の龍馬と接点があった点も去ることながら、龍馬と砲術との関わりを示す初期の記録として注目すべきである。

坂本龍馬十五年忌祭をめぐる元海援隊士の動向
―県立坂本龍馬記念館所蔵坂本直宛書簡集より―

高知近代史研究会会長・
土佐史談会副会長
今井　章博

平成二十九年度、安田町まちなみ交流館「和」で開催した企画展「其の後の海援隊士たち」で、県立坂本龍馬記念館が寄贈を受けた坂本直宛書簡を数点借用し、展示した。その中に、高知県知事も務めた丸岡莞爾が直に宛てた坂本龍馬十五年忌祭への欠席届があった。

十五年忌祭は、三吉慎蔵や土方久元の日記をみると十二月十八日に執り行われたことが明記されている。また、佐佐木高行や勝海舟の日記にも関連の事項が記されている。

これらの記録から出席した人やできなかった人が見えてくる。元海援隊士らが、維新を経て、どのような変遷があったのか、この十五年忌祭を通して浮かび上がる諸相を紹介した。

「龍馬のこころを伝えたい」

龍馬脱藩祭代表
佐竹　敏彦

龍馬生誕一五〇年の昭和六〇年に、たまたま、司馬遼太郎の『竜馬がゆく』を読んだ。すると、第二巻「風雲篇」に和霊神社が出てきた。脱藩前に立ち寄った竜馬が、先祖の霊と和霊さんの神霊に呼びかける場面である。

高知市神田高神に居を構えて以来、誘われるがままに地元の神々の氏子になり、奉納活動に参加してきた。その神社が坂本龍馬の脱藩に大いに関わりがあったのである。

すぐに事実関係を調査し、県内に残る数少ない龍馬関連の史跡だと把握した。

脱藩してまで国のために奔走した「龍馬のこころ」を子どもたちに伝えるため、昭和六〇年から毎年、龍馬が脱藩した三月二十四日を中心に「龍馬脱藩祭」を開催している。

「『竜馬がゆく』のスリルとサスペンス」

土佐中高等学校
国語教師
広井　護

司馬遼太郎の『竜馬がゆく』の総発行部数は、すでに二千五百万部を超えたと言われている。“永遠のベストセラー”と言っても過言ではない。ところが意外なことに、文学作品としてはほとんど論じられていない。

今回の研究発表では、竜馬と西郷が初めて出会う場面である“鈴虫の場面”を取り上げて、深層読みを行った。

深層読みとは、表層読みと対になるものである。表層の読みは、一見して読み取れるもので、深層の読みは、作者が文中に仕掛けたものを分析し、深く読み解いていく方法。文章の中で違和感のある言葉には、必ず作者の意図が込められており、それを読み解く楽しさを紹介した。

こぼれ話 ― 犬歩棒当記（三十八）―

福沢諭吉が嫌い

宮川　禎一

福沢諭吉は大分県中津市に旧居があるので、中津南高校出身の筆者がヒイキする偉人だ。数年後に一万円札から引退されるというので、ここに一文を書いて置きたい。

明治日本の近代化は『西洋事情』や『学問ノススメ』や『文明論之概略』など福沢先生の膨大な著作を通じて進んだと言って良い。しかし中津市の福沢諭吉記念館の方に伺うと、新紙幣の話が出るずっと前から、記念館に「お札はもうすぐ福沢じゃなくなるのだよね」とか嫌がらせ風の電話がぽつぽつあったそうで「なんで福沢先生は嫌われているのか？」とちょっと気になった。

「福沢諭吉が嫌い」の根底には、この世の中には一定程度「他者が勉強して知恵が付くことを嫌う人間の存在」があるからだと思う。「人間は勉強してこそ文明化する」とは福沢先生の終生変わらぬ主張だが、「人は無知で愚昧の方が都合良い」と考える個人やシステムはいつの時代もどこにでも存在するのだ。その方面からすれば「学問をして賢くなって一身独立して自尊しなさい」や「個人の独立ののちに国家の独立がある」や「人は賢くなってこそ上下無し」などという福沢諭吉は永遠の敵であろう。学問をせず、批判精神に乏しい人間は騙しやすいし、支配もしやすい。人に上下もあるべきだ。その方が良いと思う人やシステムが福沢諭吉を攻撃しているらしい。

一万円札の肖像が教育を勧めた福沢諭吉から近代経済の祖渋沢栄一へと転換するベースには「勉強ばっかりして、口うるさく批判するよりも、黙ってちゃんと働いて、日本経済に貢献しろよ」という経済界や財務省の思惑があるのであろう。福沢諭吉は口が悪く、喧嘩上等のスタンスなのでこんなことを言いそうだ。没後百二十年近くを経ても嫌われるとは（現代にも意味があるということ）福沢先生の偉大さを良く示していると思う。

福沢諭吉旧居記念館　中津市留守居町

第3回「龍馬のひろば」原稿募集！

お待たせしました。第3回「龍馬のひろば」は、みなさんが愛読されている司馬遼太郎先生の「竜馬がゆく」に焦点化してみたいと思います。

今年の第11回現代龍馬学会（5月25日開催）においては、広井護先生の「『竜馬がゆく』のスリルとサスペンス」も発表され、参加者が頷きながら、広井先生の世界に浸ったことでした。

本会に集うみなさんは、きっと何度も「竜馬がゆく」を読んでいることでしょう。そこで「私は、ここがスキ！」という思いや「この文章で、龍馬に惚れた」ということなどを発表しあってみましょう。

今回はハガキではなく事務局へのメールか郵送ということにします。字数制限は、今までは200字でしたが、今回は200字を超えてもいいことにします。締め切りは、11月15日。（あまり長すぎる時には、少しカットがあるかも…。）

コラム・龍馬のこと

「　天才？　」

江上　英治

現代龍馬学会で二度の発表を頂いた窪内隆起氏は、元産経新聞で司馬遼太郎の担当記者です。最初の発表が大変面白く興味深かったので、森前館長に懇願したところ、窪内氏にも快くご承諾頂きました。何しろ担当記者というのは付き人みたいなもので、普段の生活や仕事ぶりをご存知故に、リアルに話して頂けます。「竜馬がゆく」執筆にあたり、3000冊に及ぶ資料本を購入読破されたそうです。これらを読み終えるには、毎日1冊読んだとしても8年かかります。ホンマかいな！と話しを聞くうちに納得しました。実は、司馬先生は速読の達人だったのです。2ページ読むのに1分とかからず、1～2時間あれば1冊読み終える計算になります。そんな凄い司馬先生も、生活面ではなんとも笑える微笑ましい行動があるそうで、ある時、窪内氏がクルマで出迎えに行ったところ、ソックスが左右バラバラ！冬場に迎えに行った時のこと、随分とズボンが膨らんでいたので、『先生！下に何か履いていません？』すると、下ろしたズボンから股引きが出てきたそうな。野暮な質問をしたところで、『そんなもんどうでもえい。』と一喝されそう。さすが天才は遥か先を見据えておいでです。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp